

おおむらプレーパーク10周年記念誌発行に寄せて



NPO 法人おおむら里山村づくり委員会
理事長 加 固 治 男

このプレーパーク運営地がある遊休公有地（山林5万m²）は、2012年6月長崎県から3年に亘る交渉の結果、大村地区地域活性化事業協議会の協力を得て公有地貸付契約が締結されました。

市民参加型共有地化の活動を環境保全団体（スナメリの森）の仲間10名程で始め、里山村の基盤整備を一部補助金・助成金の下、進める中で現おおむらプレーパーク代表世話人の宮路さんとお出会うことができ、4年目の2015年11月プレーパークが開催されました。

今年度で本委員会は14年目を迎えましたがこの2015年は、色んな活動が動き出した年でした。ボランティアには九州電力長崎支店が参加、東屋を交流拠点に里山林、圃場整備のためのワークショップ開催によって会員は増え、更にプレーパークが加わったことで80名近くまでになり、プレーパークは本委員会の主要事業となりました。

焚火場周辺で子ども達が「野に放たれて」自由に遊び、親たちは「森の井戸端会議」さながら楽しみに休日を過ごす光景が月1回、里山村で繰り広げられています。

プレーパークがこの地に根付いていったのは強いリーダーシップ下、受益者である子どもと保護者自らが活動主体であることです。本委員会の目標とする多世代の居場所づくりとしての里山塾のイベント開催と大きく異なるところです。そしてその底には今の子ども達が置かれている社会的環境の問題があるでしょう。

サル学者で児童文学作家の河合雅雄は今の子どものロボット化に警鐘を鳴らし、戸外に放ち森で群れで遊ばせなさい、と説く。また詩人且つ児童文学者で伝道師の山村暮鳥（萩原朔太郎、室生犀星と同時代）は次の詩を残しています（「地を嗣ぐもの」から一部省略）。

みちばたであそんでみた ひとりのこども どろを捏ねてみた そのこども
そのどろで 山をこしらえ そこに木を植ゑ・・・一ばん強く そして大きく こんどは自分を創ります

この記念誌が多くの人々に読まれることを願って止みません。そしてこの里山村がプレーパークと共に次世代に継承されていくことを。